

昭和44年8月2日第三種郵便物認可
平成28年7月20日発行第48巻10号

巖谷國士
編集

DADA
STAIR-
REALISM



8月臨時増刊号
2016 no.684. vol.48-10.

dialogue

岡崎和郎

塚原 史

巖谷國士

visual

岡上淑子

上野紀子

岡崎和郎

critic

鈴木雅雄

星埜守之

四方田犬彦

安藤礼二

齋藤哲也

港 千尋

朝吹亮二

赤塚敬子

林 道郎

永井敦子

香川 檀

北山研二

神保京子

光田ゆり

朝吹真理子

ダダ・シュルレアリスムの21世紀
A・ブルトン生誕120年／没後50年
ダダ100周年&



Photo: Satoshi Nagare

DADA × Eureka SUR - Poésie et Critique RÉALISME²¹

昭和44年8月2日第三種郵便物認可 平成28年7月20日発行第48巻10号

ユリイカ

8月臨時増刊号

ISBN978-4-7917-0311-1
C9490 ¥2400E



9784791703111

定価 本体2,400円(税別)



人間デカルコマニー

大脳皮質的造形思考の超克！ 宇宙と繋がる『受身絵画』見参！

佐々木裕司

「受身絵画」とは私が考案し命名し、実践している主に柔道の前方回転受身を用いて、キャンバスに描く絵画表現です。

勿論、主な目的は、良い絵を描くことにありますが、派生的にはキャンバスを飛び出し、雪面や大地や海原や都市にも「受身絵画」します。さらに造形表現を超え、共感的に、受身絵画は聴覚的表現にも及びます。また時には時間軸を持つ、演劇行為やパフォーマンスとして展開します。

<https://youtube.com/ibu48Mo4KIU>

さてこのような画法を聞いて、美術に造詣の深い読者の皆さんの中には、白髪一雄の

フット・ペインティングや、篠原有司男のボクシング・ペインティングを連想される方も多いかと思えます。

しかし「受身絵画」と彼らの画法が決定的に違うのは、私は美術家である前に柔道少年であったという点です。

白髪はカポエイラをやっていたわけではなく、純粹な造形上の追求の結果、足を使って描き、篠原はボクサーであったわけではなく、ペインティングの手法としてボクシングのグローブで描くことを選んだに過ぎません。

しかし、私は幼少より柔道を学び、柔道は私の血肉となり自己形成の核となりました。

高校で講道館二段を取得しましたが、柔道で培われた求道心はやがて造形芸術へとシフトして行きました。アーティストである私のスタートラインはまさにそこにあります。

そこが私のアイデンティティーであることに、二度の高所からの転落事故で奇跡的に助かったこと（一回目は左大腿骨骨折、二回目は何と無傷）などを経て、四十歳後半でようやく気づき「受身絵画」が始まりました。

「受身」の動作は、日本の土武道、鑑（よ）組討ちなどで培われた、攻撃・防御の「柔」の東洋的・二元論のコンセプトを、最も良く体現したもののようです。つまり前方回転受身によるティピカルな身体痕跡の絵の具の形象が、即ち東洋的・二元論の視覚化なのです（図1）。それでは云々半ば、まだまだこれからの未熟者ではありますが、私が行ってきた「受身絵画」の軌跡をご紹介します。なお多くの活動は、表記のYouTubeアドレスから視聴できます。合わせてご堪能下さい。

1. プロローグ

自分の脳内の思考を超越した芸術を作りたいと願う私にとって、その出会いはまさに自分の意図を完璧に超えた運命の接点だった。

当時私が通っていた東京芸術大絵画科油画専攻に新しい教授が赴任して来て我々の学年担任かつ所属していたラグビー部の顧問となった。三年生の四月である。その人物は、ヨーロッパをアート活動の拠点にしていた、読売アンデパンダンの寵児、日本のネオ・ダダの異端児、工藤哲巳だった。

漱石の「坊ちゃん」に群がる松山の中学生のついで、我々、世界の辺境の地の芸大生は、「誰ぞなもし〜」「なんぞなもし〜」と工藤哲巳を珍しがった。

工藤哲巳が蚊帳の中であぐらを組み、般若心経を大音量で流し、泡がブクブクと鳥籠から出るパフォーマンスを見て、自分のアートの定義を思い切り揺さぶられた。

勉強不足の私は、工藤哲巳が何者たるかを知らぬまま、工藤哲巳肝入りの谷中アートフォーラムでの展示をやらせてもらったり、昭和天皇崩御をきっかけに、私が企画した上から読んでも下から読んでも「天皇展」を、当時ネオアカで売れっ子の中沢新一をパネラーに招いてのシンポなどを芸大で行ったりした。

卒業して間もない四月末頃、「伺いたいこ

とが」と工藤哲巳に電話したところ、マネージャーの真島直子とともに我々が屯っていた谷中の居酒屋に来てくれた。

そして、工藤哲巳は突然腹部の生々しいまさに伝説の若き日のパリ私立美術館でのハラキリのパフォーマンスをリアルにしたような、縫合した手術痕の傷を「俺はこうだ」と我々に見せ、旨っくに酒を飲みながら「お前の質問は何だ?」と問う。

そこで、卒制は結構自信があったのだが、自分が大学院の工藤研究室を落とされた理由は何か?と詰め寄る私に、「佐々木の卒制は芸大ではラージAだが、世界ではどうかかな?」との答え。その時の私は、その言葉でそこそこの自尊心がくすぐられ、かなり満足して帰宅した。完璧にバカであった!

工藤哲巳の訃報を受けたのは、その年の初冬だった。誰もが予測だにできなかった享年五十五歳の急逝だった。お通夜に向かう晩、履いて行く靴を磨きながら一人落涙した。

工藤哲巳の高い芸術への志に比べ、芸大での評価とか処世を気にし、安易な芸大生の道筋を漠然と考えていた、世俗的でチンケでシヨボい自分の浅ましい心根との対比が情け

なく、申し訳なく、俺は何と矮小だったことか! と心底思い、涙がポロポロと出た。

工藤哲巳の自己の死をも組み込んだカリキュラムはその後も継続され、数年後に訪れたパリのボンビドウ・センターの常設展で、偶然、工藤哲巳作品「接木の花園/環境汚染―養殖―新し〜、エコロジ〜。1971年 Grafted garden/ pollution- cultivation- nouvelle ecologie 1971」に邂逅するようになった。

その時「お前はまだまだそんなとこにいるのか? 早くこゝまで来い」と言う声を聞いた気がした。そして昨年(二〇一五)の竹橋・国立近代美術館での「あなたの肖像」工藤哲巳回顧展で、工藤作品の全容を実は初めて知り、様々な角度の理解を得ることが出来た。驚いたことには最後の展示室には二十五年前の泡ブクブクのパフォーマンスの映像がループ再生されているではないか。そして気が付くと、工藤哲巳の享年を一つ越えてしまっている自分があるではないか! まさに、不肖の学生である!

2. 受身絵画の誕生

受身絵画は、七年前唐突に生まれた。

当時、私は現代社会に生きる我々が、自らの肉眼や感覚ではなく、他者の意図が介在した、撮影され編集された視覚情報を判断基準として生きるしか術がないという、人類史始まって以来の未曾有の危機的状況に置かれていることを、告発するための「私の目の前にただ在る風景」シリーズを描いていた。

9・11の報道写真をもとにした絵を1000号で描き上げてから、自分の表現の方向に行き詰まりを感じていた矢先のことであった。

当時私は、天保年間の創業で野田のキッチンマンより古いという旧町田醤油工場を改造しsoysauce studioと命名し、制作と生活の場としていた。やがて、デザイナートの沼澤暁生、今中隆介、三宅公平、声楽家の松生真琴、画家の横島庄司、小川佳夫、伊藤遊波、版画家の松永啓之、斎藤佳代子らの仲間たちが移り住み、アートファクトリーと化していった。

そんな夜な夜なの議論の中で、お前の取り柄といえば、酔っ払っても転がる、ことごとろいじゃないかと皆に言われた。

色々と躊躇いはあったが、俺らが撮影して

やるからやってみろーということ、2007年の夏の日に受身絵画は、大脳皮質的思考をねめまま全くノー・コンセプトで始まった。やがて「受身絵画」はキャンヴァスを超え、河原や川底、積雪の上や、公道や、波打ち際へと展開していった。

3. 原爆の図丸木美術館「シシユボス・ナウ展」と「桃色ゲリラ」増山麗奈とのコラボ

私の芸大時代に、ドイツ帰りで講師をしていた坂口寛敏現油画教授から、原爆の図丸木美術館で現代美術の展覧会をやるが「受身絵画」に参加してみないかとの連絡を、この展覧会に参加するという友人の画家、小川佳夫経由で2008年秋にもらった。

なんでも当時丸木美術館館長の針生一郎直々の、坂口寛敏へのキュレーションの要請とのこと。

初めて行く丸木美術館での打ち合わせでは、殆どが芸大の上の学年の先輩方だったが、紅一点、十年ぐら以後輩の増山麗奈という女性アーティストが二人の子連れで参加していた。彼女は「桃色ゲリラ」なる組織をオルガナイズしたり、電気料金値上げ反対のデモをとのこと。

アート表現として行ったりしているそう。

現代美術とはいっても、モノ派世代の真面目な先輩方と、我々二人のテイストが随分と異なっていることを自ずと感じた。

すると増山麗奈が「佐々木さんがこの中では私たち二人がパフォーマーだから、会期中に二人で何かやりませんか？」と言う。そんな次第で、その展覧会は「シシユボス・ナウ展」という厳粛な命名となり、原爆の図丸木美術館というルサンチマンに新風を注ぐことを計った我々のパフォーマンスは、「受身」の「母乳」―遺伝子異常でも繋がっていたいのーという、ドーパミン、ドパドバのタイトルとなった。

<http://youtube.be/EF50PhtqoIE> (前半)

(後に福島原発建屋が爆発するに及んで、我々のこのタイトルは笑えない現実となった。)

また、私個人としての出展作品は「BLUE」と「X」という、タブローと映像作品で、映像作品は会期中、原爆4部作の怖い巨大絵画が恒久展示されたスペースの床にループ再生でプロジェクトンされた。

「BLUE」は、西洋人で初めて講道館柔道

四段を習得したイブ・クラインへのオマージュとアイロニーを表し、「X」は究極の受身が造形的にも究極の美であることなどがテーマであった。

「BLUE」 <https://youtu.be/7lG6KoutMxE>
 「X」 <https://youtu.be/ueBlOYCgv5w>
 そして気を良くした私と増山は、さらに仲間を募り、2009年三月「六本木大祓の儀」

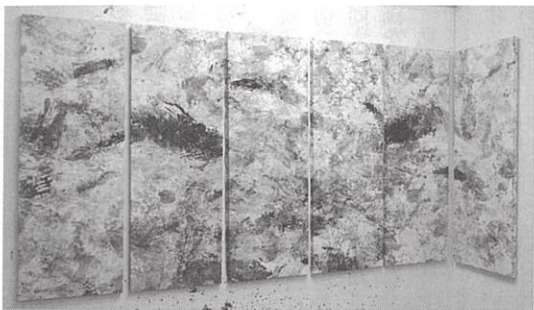


図1 受身絵画 カラーバージョン 24色相環シリーズ 本間六曲屏風仕立、2015—2016年



図2 世界遺産ザルツブルグでの公開制作 2009年



図3 2014年のタイムズ・スクエア・アメリカイグゼルビル 受身絵画

<http://youtube.be/EF50PhtqoIE> (後半)

フォーマンズ。

四月、初台パフォーマンス
<https://youtu.be/iMMeBRzn7s>
 八月、「パリアート革命」。凱旋門からコンコルド広場まで前方回転受身で踏破 with「桃色ゲリラ」。頭に装着したビデオカメラにより、映し出された回転するパリの映像が増山麗奈が装着している「Vブラ」に映るといっパ

フォーマンズ。
<http://youtu.be/fgZWP2-zf5E>
 そして、パリを後にして、ザルツブルク・ミュージアムでのパフォーマンスと展示へと突き進むこととなった。
 ザルツブルク・ミュージアム・パフォーマンス《a manifold》
 Act1「旋律とノイズ」 大山結子+増山麗

奈十佐々木裕司+アリコ（ピアノ演奏）

<http://youtube.be/crT1XoAXyO4>

Act2 「リスペクト・フォー・マイケル・ジャクソン」 増山麗奈

<http://youtube.be/crT1XoAXyO4>

Act3 「受身絵画」 佐々木裕司

<http://youtube.be/RgyyoutRugFM>

帰国後の秋、塚原史早稲田大学教授の名物講義で、増山と私がパネラーをしたことを切っ掛けに、早稲田大学での「生々ダ」展と同大学小野記念講堂でのパフォーマンスの企画を、新たな仲間も加わり行うこととなった。私は早稲田大学へのオマージュを込めて、学徒出陣で戦死した早稲田の学生たちを鎮魂するために、日の丸を身に纏い、早稲田構内の戦没学生の慰霊碑と靖国神社に受身参拝するというパフォーマンス「鎮魂！ 殺戮の世紀 MODERNISM」を行い、泥で汚れた日の丸を早稲田のギャラリーに展示した。

<https://youtu.be/qAtBXOixY9I>

5. 「ヨカチン」と「受身絵画」

そんな矢先、芸大を卒業しておよそ二十年ぶりに再開した会田誠から、突然「ヨカチン」をやってくれないかと電話が掛かってき

た。なんでも彼の新作「ヨカマン」の参照資料とするのだそうだ。

我々は彼が誘うままに居酒屋で飲み、次に二人でカラオケ屋に行き、数曲歌った後、会田の求めに応じて芸大ラグビー部伝統の宴会芸ヨカチンをやり、会田はビデオカメラを回した。まったくどう誤解されてもおかしくない怪しい光景だったと思う。

やがてこの映像は会田誠のビデオ作品に収まり、ミズマ・アートギャラリーでの彼の「絵バカ」展でのレセプションに、私は「受身絵画」で登場し、仮設のステージの上で会田誠個展を言祝ぎ、「ヨカチン」をやることとなった。

さらに驚いたことに、その画像が翌日の朝日新聞で全国に公開されているではないか。その夜、私の「ヨカチン」で浄められた一升瓶の酒は会田の酌で、観客に振舞われ、あつという間に空になった。

6. 野見山暁治に「無茶苦茶だ！」と最高の褒め言葉を頂く

かつて亡母が幼き私を連れて家出し、飯塚の実兄を頼った折、炭鉱家の野見山さんというお宅に住み込み女中としてお世話になった

話を、一九九四年にパリで日本の縁日をやるというイベントのスタッフとして出会って以来の友人、学芸員の土方明司にしたところ、もしかして野見山暁治の実家かな〜ということになり、本人に会って直接聞こうということになった。

折しも野見山暁治が木更津で個展をやっていたので、早速伺い尋ねたところ、「ウチは女中を置くような家ではなかった。本家かな」とのことだった。

その後、散会の直前に「受身絵画」墨シリーズの出力した写真を披露したところ「無茶苦茶だな！」との一言！

老画家の目はなまぐらではなかった！野見山暁治は鋭い洞察力を持って「受身絵画」の本質を一瞬で看破した！私は日本近代絵画の古参の画家の口からこの最高の賛辞を頂き、心底嬉しく、老画家の手を硬く握り締め、謝辞を述べ健康を祝し帰途に着いた。この出来事は、きっと母が導いてくれた「受身絵画」が近代絵画のテーゼの圏外に既に立脚していることを示す確証であったのだと思う。

7. 受身絵画その後の展開

二〇一〇年八月十五日、靖国神社うさぎ跳び参拜。

<https://youtu.be/Df-aM4MXPek>

二〇一一年三月「受身絵画3・11グラウンドゼロを転がる」の企画で「平面プロセス」新藤武吉、森一博たちとNYC遠征の真っ只中、何と9・11勃発。急遽タイムズ・スクエアでマクドナルドの紙袋で「受身絵画」募金を行う（日本赤十字に寄付）。

<https://youtu.be/mqPh88cgrtw>

二〇一二年七月、もとユダヤ教のシナゴーク、NYCエンジェル・オランザンツ・ファンデーションにて「受身絵画」公開制作、三〇〇〇人が熱狂！ Ukemi Painting in NYC 23 July 2013.

<https://youtu.be/OahNRA5nyIk>

二〇一四年七月、NYCタイムズスクエア・アメリカナイゲルビル、ビル全体のビルボードでSASAKIというクレジット入りで二〇一三年のパフォーマンスの画像が紹介される。

二〇一四年十一月横浜トリエンナーレ

「ART.BIN」VIP参加。はからずも森村泰昌とアートバトル。

二〇一五年十二月、「受身絵画」の聴覚的展開を目的に、「ウルトラ田楽隊」結成。

8. 最新作「受身絵画」カラーヴァージョン、CMYKシリーズとRGBシリーズのコンセプト

かつてモンドリアンが、赤と青と黄色の三原色と白と黒の明暗を用い世界を表現しようとしたことの「受身絵画」カラーヴァージョンでは、現代社会の視覚情報を形成している印刷媒体の三原色CMYK、インターネットのディスプレイなどの視覚情報を形成している三原色RGBを用いて、世界を表現したい。

モンドリアンの表現が神智学に根ざす觀念的昇華だったのに対し、私の表現は印象派以来、現代のデジタル・テクノロジーに至る、並置混色の連綿たる色彩表現の文脈の昇華である。ハリウッド映画やマッキントッシュ・コンピューターや全てのデジタルのビジュアル技術が用いている世界の捉え方を、現代の絵画表現として表したものである。

モンドリアンが画面の中の垂直水平線で表

そうとした重力は、「受身絵画」では画面の遥か深淵に向かう地球の重力を、回転のエルギーに変換した全ての絵の具の痕跡に表象されている。

9. エピローグ

私は「受身絵画」を通じ、芸術の力で世界を少しでもより良い方向に変化させたいと思っている。

そこで、二〇二〇年の東京オリンピックの開会式で「受身絵画」を行うことを提案する。かつて北京オリンピックの開会式では、蔡國強の「火薬絵画」が起用され、世界をあつと言わせた。言うまでもなく「火薬」は中国の発明品だ。では、日本は？ オリンピック種目の中で日本発祥の世界種目と言えば「柔道」ではないだろうか。

具体的には、巨大キャンヴァスに出場する世界の柔道選手が「受身絵画」を描く。五輪の輪などはどうだろうか。音楽の演奏などとコラボしても良い。

私はこの原稿を通じ、広く皆さんにその実現を呼びかけたい。

(たさき・ゆうじ/アーティスト)